実践事例 4

小学校時代から中学生の学習習慣を身に付ける「ジョイントプログラム」

京都府 京都市教育委員会・京都市立京都御池中学校

学校単位での取り組みに加え、近年では小・中学校の接続を意識した学習習慣の育成に、自治体ぐるみで取り組もうとする動きも出てきている。京都市教育委員会が全市で進める「ジョイントプログラム」「学習確認プログラム」と、その活用の一例として京都市立京都御池中学校の取り組みを紹介する。

課　題

- 中学校で求められる学習スタイルへの移行がスムーズにいかない
- 中学校が新入生の学力を早期に把握しにくかった
- 小・中学校で共通する学力分析の基盤がなかった

実　践

- 2008年から「ジョイントプログラム」を開始。小5で2回、小6で3回の確認テストを導入
- テスト前の事前学習教材とテスト後の事後学習教材を用意。事前学習→テスト本番→事後学習の学習サイクルを小学校時代から経験させる
- 小6の3回目の確認テストを中1の4月、入学直後に設定。小中の学びの橋渡しという位置付けに
- 中学校でも、ほぼ同じ形式の「学習確認プログラム」を3年間実施

成　果

- 事前学習→テスト本番→事後学習というサイクルを小学校時代に体験させることによって、中学校の学習スタイルにスムーズに移行できるようになった
- 中学校が早期に新入生の学力を把握できるようになった
- 小中の教師のテストに対する考え方の違いが分かり、両者の連携の重要性を再確認できた
- プログラムに一貫性があるため、自学自習の習慣付けを継続的に行えるようになった

School Data

◎3つの中学校が統合して2003（平成15）年に誕生。校舎は、高齢者福祉施設や保育所などとの複合施設として整備された。校区の御所南小学校、高倉小学校と小中一貫教育を展開。

校長◎廣瀬忠愛先生

生徒数◎638人　学級数◎22学級（うち特別支援学級3）

所在地◎〒604-0955　京都市中京区柳馬場通御池上る虎石町45-3

TEL◎075-221-0414

URL◎http://cms.edu.city.kyoto.jp/weblog/index.php?id=201209

公開研究会◎2010年11月12日（金）

京都府京都市

◎人口約146万人の政令指定都市。市立中学校は75校、市立小学校は177校。全国トップレベルの年間205日以上の授業日数を確保した上で、小中9年間一貫した指導に力を注ぐ。

京都市教育委員会

所在地◎〒604-8571
京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488
担当課◎学校指導課小中一貫教育・学校運営企画担当
TEL◎075-222-3801

京都市教育委員会の取り組み

小中一貫教育の中で学習習慣を定着させる

小中一貫教育に全市で取り組む京都市。その推進に向け、小・中学校の学校段階を超えて、児童・生徒に学習習慣を定着させる活動に取り組む。小学校を対象とした「ジョイントプログラム」、中学校を対象とした「学習確認プログラム」だ。教育委員会学校指導課の安達敏明参与は次のように語る。

「本市でも児童・生徒の学習習慣をいかに確立するかは大きな課題です。中でも、小学校段階において、一定の学習範囲を見越した上で、必要なことを自分で見つけて学ぶような学習スタイルを身に付けられるかどうかは、中学校の学習スタイルへの適応、ひいては高校入試に向けた学習をきちんと進められるかどうかを左右すると考えています。そこで、小学校段階から一定期間ごとにテストを行い、その事前・事後学習を繰り返すことで、中学校の学習にスムーズに移行できるようなプログラムを始めました」

このようなプログラムの必要性を最初に提言したのは、同市の中学校校長会だった。1993年、当時の文部省の方針を受けて業者テストが廃止された際、「学習習慣を定着させるためには、一定期間ごとにテストを受けることがやはり必要である」との考えから、同市の校長会はそれ以降も独自のテストを年4回実施してきた。しかし、作問や採点を現職の教師が行っていたために、校務との両立や出題レベルのばらつきなどが課題となっていた。こうした状況を受け、市教委の支援と現職教師でつくる「教育研究会」の協力を得て、校長会を中心に取り組みが発展したのだ。

まず、2006年度に「学習確認プログラム」が始まった。これは、中学1年生で1回、中学2年生で3回、中学3年生で3回のテストを実施し、テスト前には既習事項を復習する「事前学習教材」、テスト後には個別の成績資料と達成不十分だった内容を振り返る「事後学習教材」を配布するというもの。08年度には同様の取り組みを小学校でも実施する「ジョイントプログラム」を開始。小学5年生で2回、小学6年生で3回のテストを行うものだが、小学6年生の3回目は中学1年生の4月に実施とした。小学校6年間の総復習となるテストを中学入学直後に行い、小中の学習習慣の接続を図るのがねらいだ（**図1**）。

「中学校では、授業で習った複数の単元から自分に必要な部分を見つけて取り組むという学習スタイルが求められます。小学校では単元が終わるごとにテストを行いますから、何も知らなければ、中学校での学習スタイルの変化に戸惑ってしまいます。『ジョイントプログラム』によって、小学校高学年の段階から、中学校のスタイルを取り入れた学習に慣れさせることができます」（安達参与）

事前学習→テスト→事後学習のサイクルを小学校時代からつくる

「ジョイントプログラム」「学習確認プログ

図1　「ジョイントプログラム」「学習確認プログラム」の概要

	小学校		中学校		
	1～4年	5年	6年	1年	2年	3年
学習習慣・学習意欲の基礎づくり 家庭との連携	**義務教育をつなぐ「ジョイントプログラム」** ねらい ・基礎基本の定着 内容 ・小5（2回）、小6（2回）、中1（1回）、国語・算数のテスト形式も含めた振り返りの学習 ・長期休業期間の学習支援 ・小中連携学習システム ・事前・事後の学習教材で自学自習を支援			**自学自習支援のための「学習確認プログラム」** ねらい ・生徒の学習改善、自己点検と計画的復習 内容 ・中1（1回）、中2（3回）、中3（3回）、5教科テスト形式で自己分析 ・生徒自らが学習の定着状況と学ぶべき課題を定期的に確認し、計画的な学習を進める ・事前・事後の学習教材で自学自習を支援		

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第3回

中学校導入期に学習習慣を定着させる

ラム」の特徴は、既習事項の復習から確認テスト本番、テスト後の振り返りまでが一体となっていることだ。

年度当初にテストの年間出題予定表（図2）や事前学習用の教材が配られ、これらを使って確認テストに向けた勉強を進める。「ジョイントプログラム」では、確認テストの時期を夏休み明けや冬休み明けに設定し、事前学習用の教材は夏休みや春休みの宿題に位置付ける。長期休業中に学習習慣が崩れるのを防ぐためだ。更に、確認テスト後には事後学習用の教材を配布し、テストの復習に取り組ませる。

「事前・事後学習用教材の活用の仕方は、学校に任せています。例えば、事後学習用の教材は、答え合わせの後に宿題として課す学校もあれば、放課後学習の教材として使う学校もあります」（安達参与）

図2「出題予定表とできたかなチェック表」

「出題予定表とできたかなチェック表」には、テストの時期と出題範囲が示され、事前学習→テスト→事後学習の学習サイクルの確立を促している

確認テストや事前・事後学習の教材は、教育研究会を中心に、指導主事らが加わって練り上げている。一方、かつての反省を踏まえ、教材の印刷や採点、データ処理などの作業は外部業者に委託する。これにより、採点作業が効率化され、受験後25日ほどで、学習の定着状況を細かく示した「個人成績資料」を解答用紙と共に返却できるようになった。

「事前学習→テスト→事後学習を円滑に繰り返すためには、採点や分析をできるだけ早く行うことが大切です。学校現場の負担も考慮して、一部の業務を外部業者に委託しました」（安達参与）

小学生の学習スタイルがプログラムにより変化

「ジョイントプログラム」「学習確認プログラム」によって全市で共通した確認テストの実施が可能になり、小・中学生の学力を共通の基準で分析できるようになった。その結果、小学校教師と中学校教師のテストに対する考え方の違いが次第に浮き彫りになってきたと、安達参与は語る。

「小学校の先生は、子どもに良い点数を取らせて自信を付けてあげようとする発想が強いようです。そうなると、問題がどうしてもやさしくなり、平均点が80点前後になります。ところが中学校の先生は、高校入試という出口を視野に入れているため、平均点が60点くらいになるテストを作ります。子どもにしてみれば、小学6年と中学1年の間に大きなギャップを感じて戸惑うことになります。現在、小・中学校の教育研究会では、『ジョイントプログラム』の確認テストの平均点を段階的に下げるなど、うまく小中のつなぎになるような方法を模索しています」

プログラムを受けて、小学生の学習姿勢が変わってきたとの声が現場から聞かれるようになった。「ジョイントプログラム」では、事後学習よりも事前学習のボリュームが厚くなっている。そのため、小学生のうちから出題範囲を見て事前学習する姿勢が身に付いてきているというのだ。

「小学校側からは『子どもが中学校の学習にスムーズに入れたのかを知りたい』という声も挙がるようになりました。小・中学校の9年間を通して、学習習慣をしっかり身に付けた児童・生徒を育てていきたいと考えています」（安達参与）

京都市教育委員会学校指導課参与
安達敏明 Adachi Toshiaki
「教師個人には長所も短所もあるが、教師集団として、教師の長所を子どもたちにしっかり伝えたい」

京都市立京都御池中学校の取り組み

課題だった新入生の学力把握が「ジョイントプログラム」で改善

京都市の小中一貫教育のパイロット校としての役割を担う京都御池中学校は、校区の御所南、高倉の両小学校と小中一貫教育を進めている。両小学校の児童は1年生から5年生までではそれぞれの小学校に通い、6年生からは同中学校の校舎で学ぶ。いわゆる「5・4制」に基づく小中一貫教育が展開されている。

そうした同校だけに、小学6年生の授業に中学校の教師がチーム・ティーチングで入ったり、小・中学校の教師が学習指導の方針について話し合ったりすることは、日常的に行われている。しかし、廣瀬忠愛校長によると、新入生の早期把握に基づく学習指導という点においては、全く問題がないわけではなかった。

「職員室では、『理科が苦手な学年だね』『この学年は数学のこのあたりが弱いですね』といったことが話題に上っていました。しかし、『この生徒はこの単元が弱い』といった生徒個々のレベルとなると、共通の話題とするような基盤がなく、なかなか具体的な話が深まりにくいところがありました」

そうした状況を変える契機となったのが、先に紹介した「ジョイントプログラム」だ。早期に新入生の学力が把握できるようになり、その結果を基に学習習慣の定着を図ることが可能になった。

「以前、4月当初に教育研究会が実施していたテストは、結果が返却されるのが夏休み前までずれ込んでしまい、新入生一人ひとりの学力をすぐに把握するのは困難でした。しかし、『ジョイントプログラム』の確認テストの結果は、ゴールデンウィーク後までには返ってきます。生徒が小学校時代にどの教科のどのあたりでつまずいているかを把握し、いち早く手立てを打てるようになりました」（廣瀬校長）

9年一貫カリキュラムの改善にテスト結果を生かす

「ジョイントプログラム」の結果を受けた具体的な改善事項の一つは、同校ならではの小中一貫カリキュラムへの反映だ。小中一貫校の利点を生かし、同校では9年間を見通したカリキュラムを作成しているが、確認テストの結果を踏まえて、小学校教師と話し合いながら内容を調整できるようになった。

「例えば、生徒が苦手としている単元があれば、小学校でその単元の指導を手厚くしてもらったり、中学校入学後に、その単元の復習の時間を増やすといった対応が柔軟に出来るようになりました。本校の教科会には小学校6年生の担任にも入ってもらっています。共通のデータを基に話し合うことで、改善もスムーズに進められます」（廣瀬校長）

京都市立京都御池中学校校長
廣瀬忠愛 Hirose Chuai
「生徒も教師も皆が笑顔になれる学校、子どもたちの能力を伸ばせる学校、皆で力を合わせられる学校にしたい」

中学校の学習サイクルが小学校時代から体験できる

事前学習→テスト本番→事後学習という中学生として求められる学習サイクルを、新入生が小学校時代に体験できるようになったことも、「ジョイントプログラム」の成果の一つと廣瀬校長は言う。

「中学校では定期テストに向けて、複数の単元にわたる出題範囲の中から、自分で必要だと思う内容を判断して学習する姿勢が求められます。『ジョイントプログラム』では、テストの実施前にあらかじめ出題範囲が示されますから、児童も『広い出題範囲を自分で勉強していかなければ』という意識を持って臨みます。以前は、授業中に『小学校で出来たはずなのに、どうしてできないの』ということが度々ありましたが、『ジョイントプロ

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第3回

中学校導入期に学習習慣を定着させる

グラム』によって、広い範囲を総復習することが出来るので、知識の定着が促されていると思います」

「学習確認プログラム」で小学校からの流れを切らさない

「ジョイントプログラム」を引き継ぐ形で行われる「学習確認プログラム」の活用にも、同校は力を入れる。国語、社会、数学、理科、英語の5教科について行われる確認テストに向け、出題範囲を計画的に総復習し、達成状況を定期的に確認するよう指導することで、自学自習の習慣化に役立てている。

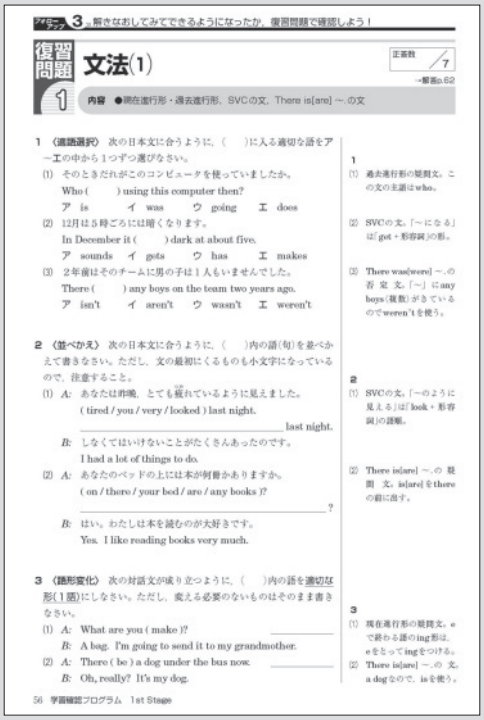
「生徒には年度当初に配布する『年間出題予定表』や、教科ごとの細かい内容を記した『教科別年間計画』などを活用して計画的な学習を進めさせます。そして、確認テストの実施後には、『個人成績資料』と共に事後学習教材である『フォローアップシート』を配布（図3）。弱点克服のための自己学習に取り組むというサイクルをつくります。生徒は小学校時代に『ジョイントプログラム』を受けていますから、このプログラムが学習習慣定着のためのものであることを理解しています。成績に反映されないからといって手を抜くようなこともありません」（廣瀬校長）

更に、学習習慣がしっかり身に付くよう、事後学習のための「フォローアップシート」を宿題として課した上で、担任が点検している。また、「個人成績資料」の返却もホームルームの時間を使って丁寧に行い、生徒一人ひとりが自分の弱点や苦手な単元を理解できるよう促している。

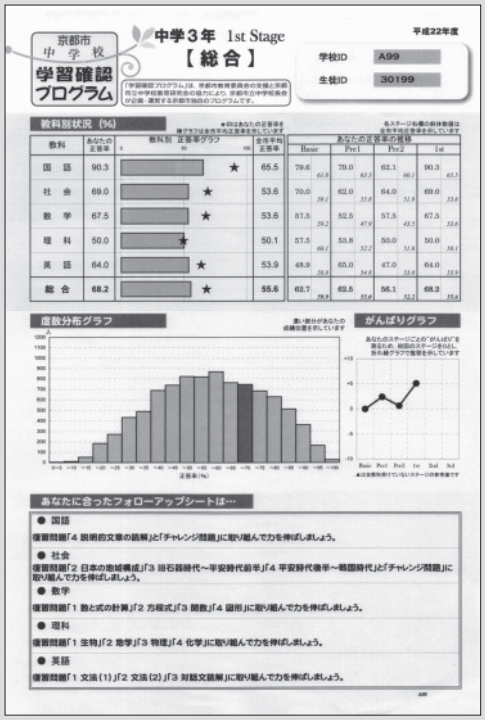
今後の課題は、学校としてデータの活用をどう進めるかだという。

「生徒の個人成績資料のほかに、学校用資料として生徒個人ごとの出題内容別正答率、小問別正誤一覧などがあります。これらのデータの活用を校内でどのように進めるのかが今後の課題です。例えば、ひとくくりにデータと言っても、クラス担任や教科担任が必要なのは個々の生徒がどの単元のどこでつまづいているのか、といったレベルのデータでしょうし、主任クラスの先生ならば、学年全体の大まかな傾向や、全市と比較した場合の苦手分野の把握などでしょう。校長としてうまくデータを先生方に示していくことが求められていると思います」（廣瀬校長）

図3　「フォローアップシート」と「個人成績資料」



「フォローアップシート」は、テストの実施ごとに分冊になっており、問題と解答・解説がまとめられている。このプリントに取り組めば、テスト範囲を復習できるというわけだ



生徒に配られるテストの成績資料。課題のある分野が一目で分かる